

発行 昭和48年10月8日(月)
発行所 長野県伊那北高等学校
刊行委員会
発行人 高田 豊
編集人 竹 入
印刷所 合資会社 中山印刷所

薫岡新聞

青春の炎と涙

取りかかりが遅れて危ぶまれた第十九回ペン祭も大盛況に終わった。ただ一言「三年生の皆様御苦労様でした。M・Fも伊那校祭もしてファイヤーストームもすて生徒一人一人の心に強く焼きついておられます。あのファイヤーストームの炎と若人の感激の涙をいつまでも心に残しておきたいものです。」

人間への思い出

生徒会長 長田 透

若き者たる姿を誇らしも増して、ゆるぎなく立ちあがり、そびえ立って、あんな大きな木々も、どこかともなく駆けてくる北風に、みるみる衣をはがされ、自分の生命を絶たれた哀れな枯葉は、カサカサと音をたてて回転し、あてもなく地面をさまよいついていた。俄かにおそつてくる突風に、驚きと恐怖の目をまはりながら、寂しげな足音を残し、あるものは小さな山となり、あるものは風車となり、はるか彼方の土手へと消えていった。だが、このように衰えてしまった木々も、また次の年には、あの若き者たる姿をよみがえらせ、変化と苦悩に満ちたこの大地に、以前より

ペン祭を終えて

学校長 加藤 裕

初秋ともなれば、県下各々も秋意を帯びてきた。当然のなり行高校の所謂文化祭の花きも、もうそろそろ散り終り、年々歳々既に二十回前後もくり返されたこの行事には、この学校、この生徒会、このユニークなものが形として打ち出されるための形勢として、研究のプロセスが短い「素材的な(種がついて来た)背景が乏しくなってきた」と言えるかも知れない。この辺り過程の長さ深さ、広がりという点から見て、冷静に今一度、夏休みの前にして、終わりがペン祭を振り返り、見ることが必要ないだろうか。これが問題提起の一つである。

井蛙

藤原 正則

「ペン祭……」が、夏休み……が、終わる。二期が始まる。またヤラにやなるまい。」右の文章は、昨年ある人が書いたもの。この文章で、何をヤラにやならないかを問う。勉強なのだから、かかこの文章を書いた人を僕は知っているが、どういふつもりでその人は書いたのか。

ペン祭雑考

伊藤 聡

正直な所、僕は原稿用紙を前にして先程から何か躊躇している。踏ん切りが附かないのだ。ペン祭全体を把握しそれを活字にする等は僕の想像力から推し量るに到底不可能である。魔法でも用いれば別だが……そこで僕は、ペンの頭をソックと撫で、如く柔かく優しく上げられぬ様算段して置く心算だ。この事を胸に書いて読んでもらえば幸いだ。

赤頭巾ちゃん気をつけて

藤原 正則

大海のまっただ中の一艘の小舟。ほくらはそんな小舟に乗って青春児の「パッチ」を奮揮してやろうと秘かにたくらんでいる。しかし彼らは思いきりのパッチをカラブリしたおもしろいところ(ピンツ)とカチ。たった三回の思い切り











